



Data

監督・脚本: パブロ・ラライン
出演: マリアーナ・ディ・ジローラ
モノガエル・ガルシア・ベルナル
パオラ・ジャンニーニ
サンティアゴ・カブレラ
クリスティアン・スアレス

👁️👁️ みどころ

(この女)、きわめて不道徳！普通これは罵り言葉だが、“愛の罭”を仕掛ける女・エマに対しては、誉め言葉！？

私にはレクテンダンスの何たるかはさっぱりわからないが、激しいリズムで踊る中、果たしてこの女は一体どんな戦略を練っているの？

7歳の養子が引き起こした放火事件から始まった本作が、ええ、こんな結末に！？その結末は、あなたの目でしっかりと！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ええ、こんな結末に！？“愛の罭”の結末にビックリ！■□■

同日の先に観たソフィア・ Coppola監督の『オン・ザ・ロック』(20年)は、お手軽なコメディタッチと安易なハッピーエンドに少し失望したが、続けて観た本作では、「ええ！こんな結末があるの！？」と、ラストに見るハッピーエンド(?)の姿にビックリ！そのネタを最初にバラすわけにはいかないが、本作には若く美しいダンサーのエマ(マリアーナ・ディ・ジローラモ)と振付師の夫ガストン(ガエル・ガルシア・ベルナル)の他、エマと不倫に陥る消防士兼バーテンダーの男アニバル(サンティアゴ・カブレラ)と、その妻でエマから離婚の相談を受ける女弁護士のラケル(パオラ・ジャンニーニ)らが登場する。

本作導入部では、エマ夫妻が養子として引き取っていた、コロンビア移民の7歳の少年ポロが放火事件を引き起こしたため、彼を児童福祉局に帰さなければならなくなるストーリーが描かれるが、ポロはなぜそんな事件を引き起こしたの？エマ役で映画初主演をしたチリの新進女優マリアーナ・ディ・ジローラモを発掘したパブロ・ラライン監督は、冒頭のエマに火炎放射器を背負わせて登場させたり、逆に中盤では消防士の姿で放水シーンに挑戦させたりと、本来のダンスでの激しい動き以外でも大活躍させている。しかし、近時

の何事もわかりやすい邦画と違って、本作のそれらのシーンの意味はまったく説明されないの、それらの意味とストーリーとのつながりについては、一つ一つ自分の頭で考える必要がある。しかして、本作のあつと驚く結末にはビックリ！

本作の原題は『Ema』だが、邦題はそこに「愛の罣」というサブタイトルをつけている。なるほど、このサブタイトルに納得！本作の結末がすべてエマが仕掛けた「愛の罣」によるものだとすれば、エマの戦略の確かさにもビックリ！

■□■不能の夫、消防士、その妻、それらがすべてエマの獲物？■□■

本作の冒頭、レゲトンダンスとよばれる激しいリズムのダンスを、大勢のダンサーたちと共に踊っているエマの姿が登場する。その振り付けを担当し、ダンサーたちを厳しく指導しているのが夫のガストンだ。他方、エマが小学校でダンスの教師をしていることは、職員会議の様子でわかるし、エマの姉が顔にやけどを負ったのは、ポロの放火事件のせいであることもわかる。また、エマが「あなたはただのワガママ娘よ」と罵られながらも、ソーシャルワーカーの女性に必死に食い下がっている姿を見れば、ポロの居場所（新しい養子先）を聞き出そうと必死になっていることがよくわかる。

他方、ポロを巡って再三夫婦喧嘩をしているガストンとエマの姿を見ていると、次第にガストンが性的不能な夫であることがわかってくる。なるほど、そのためにポロと養子縁組を……。しかし、この夫婦は今や限界となっていたため、エマは女性弁護士ラケル（パオラ・ジャンニーニ）のもとを訪れたが、それと並行して、ラケルの夫で消防士兼パーティーであるアニバル（サンティアゴ・カブレラ）とも知り合い、次第に深い関係になっていくから、アレレ……？

本作のチラシにもパンフレットにも、「大胆にして綿密、ジェンダーレスでありボーダーレス。これまでの価値観を壊して誕生した、これからの時代の新たなヒロイン。」との文字が躍り、エマのことを「きわめて不道徳」と評価しているが、スクリーン上の展開を見ていると、まさにその通り。激しい音楽の中で「きわめて不道徳」な行動をとり続けていくエマ役を演じたマリアーナ・ディ・ジローラモは、グラマラスな肢体ではなく華奢で小柄な体系なので、きっと日本人男性向け。「エマが放つ予測不能の“罣”にだれもがハマる——」と書かれているから、もし機会があれば、私もそのエマの“愛の罣”にハマってみたいものだ。

■□■日本版リメイクなら、エマ役は秋吉久美子がピッタリ！■□■

2020年 NHK 大河ドラマで駒役を演じている女優・門脇麦は、今や日本を代表する若手女優の1人に成長している。しかし、三浦大輔監督のR18+指定映画『愛の渦』（14年）（『シネマ 32』未掲載）における、「地味で真面目そうな容姿ながら誰よりも性欲が強い女子大生」の“女1”役が彼女の映画初出演作だ。したがって、本作をもし日本版にリメイクした場合、彼女がああイメージ通りで今でも勇気をもって出演してくれればエマ役にピッタリだが、今や国民的女優に成長した彼女には無理だろう。しかし、50年前なら

私が大好きだった女優・秋吉久美子がエマ役にピッタリだ。

日活で、吉永小百合や和泉雅子の次世代として登場した秋吉久美子は、映画では『赤ちょうちん』(74年)、『妹』(74年)、『昭和枯れすすき』(75年)、『シネマ10』55頁)等での演技で注目されるとともに、私生活では「子供を卵で産みたい」という“トンデモ発言”が大いに話題を呼んだ。私はエキセントリックな個性派女優という点では、加賀まりこと秋吉久美子が双璧だと思っている。そう考えると、もし本作を日本版でリメイクするならば、秋吉久美子がピッタリ！

■□■エマの戦略はお見事！“愛の罠”のカラクリは？■□■

冒頭でソーシャルワーカーの女性に必死に訴えているだけのエマは、一見哀れなバカ女のように見えるが、本作ではストーリー全編にわたって、エマのアナーキーさ、性的な奔放さの他、本業で見せるダンスの見事さや、何とも意外な放火魔の姿等、さまざまな変幻自在の姿が際立っているから、それが興味深い。また、ポロの新しい養子先を探りだそうと必死に食い下がっているエマの姿を見ていると、一面では母親の愛情の無限さを感じさせるが、ストーリー展開上は、その成果は明らかにされない。しかし、ストーリーの後半に至って、エマが再びある小学校のダンス教師に応募し、校長との機微に満ちた会話(採用試験?)の末、採用を勝ち取る姿を見ていると、エマの戦略の見事さにビックリ！つまり、少しだけネタばらしをすれば、エマはソーシャルワーカーからしっかりポロの新たな養子先を聞き出し、それに沿った戦略を明確に立てていたわけだ。

エマが「きわめて不道徳」な女であるだけでなく、相当な戦略家であることは、激しいダンスシーンや激しいセックスシーンの中に目を奪われることなく、ストーリーの本筋をしっかりと見定めていれば明白。すなわち、女性弁護士・ラケルへの離婚相談はあくまで表向きで、その真の目的が彼女の夫アニバルとの接触と彼の誘惑であったことが次第に見えてくる。他方、エマが既に別居していた夫ガストンに、彼を挑発するかのように、他の男と付き合っていることをほめかすのは一体なぜ？そこではエマの“魔性の女”としての生き方が明確だが、ガストンは性的不能なのに、なぜエマは本作後半に至って妊娠するの？その“お相手”は一体誰？毎晩不特定多数の男たちとの性交を繰り返したから、父親知れず？いやいや、きっとそうではない。エマの戦略は明確だ。

しかして、ある日タクシーの中で、エマはポロに対して「もうすぐ兄弟ができるからね」と語りかけていたが、さて、その実態は・・・？それは、驚くべき本作ラストのシーケンスで、あなた自身の目でしっかりと！

2020(令和2)年10月19日記